

普及だより いわき

平成 25 年 1 月 10 日

No.139



編集・発行：福島県いわき農林事務所農業振興普及部

地域農業推進課 (0246)24-6162 経営支援課 24-6161

園芸産地振興担当 (0246)24-6161 農業振興課 24-6160 FAX 24-6196

E-mail : shinkouhukyu.af07@pref.fukushima.lg.jp

夏秋ねぎの新たな取組みを！！

栽培体系	月旬	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月		
		上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下	上中下		
栽培体系	現況	＜チェーンポット育苗、手植え育苗、機械定植育苗＞													
		○ ——— × ———													
		○ ——— × ———													
栽培体系	夏秋	＜2月播き チェーンポット育苗＞													
		○ ——— × ———													
		○ ——— × ———													
○は種 ×定植 ■ 収穫															

いわき地方は、福島県でも温暖な気候で、冬場も適温であることから、秋冬ねぎの栽培に最も適した県内一のねぎ産地となっています。しかし、最近では、生産者の高齢化等のため、栽培面積や単位収量の減少等の問題が生じています。

そこで、現在栽培している秋冬ねぎに加えて、夏秋ねぎを新規に導入することをお勧めします。右表に示したとおり、秋冬ねぎよりも単価が高いというメリットがあり、生産者の経営安定や年間の労力分散が図れます。

特に、「1月播き栽培」のメリットは、比較的、単価の高い9月頃に出荷できることと、米や秋冬ねぎの収穫と重ならないことです。

夏秋ねぎ栽培体系を導入することで、いわき地方におけるねぎの周年化を進めていきたいと考えております。

項目		秋冬ねぎ (10a)	夏秋ねぎ (10a)
粗収益	収量 (kg)	3,500	3,000
	単価 (円/kg)	244	297
	粗収益 (千円)	956	891
費用	生産費 (千円)	350	238
	流通経費 (千円)	348	296
	小計 (千円)	698	533
収益性	所得 (千円)	258	358
	所得率 (%)	27	40
	労働時間 (時間)	359	324
	1日当りの所得 (円)	5,747	8,744

※夏秋ねぎの単価は平成 21～22 年度の 2 ケ年平均とした。

※費用には機械費（修繕費、減価償却費）を含めない。



夏秋ねぎ栽培技術向上セミナーの様子

平成 24 年度産米の全袋検査について



いわき市内で生産された米は、生産物の安全性確保のため2段階で放射性物質の確認が行われました。第1段階は地域で生産された米の出荷・販売の可否の判断をするモニタリング検査であり、第2段階は県独自の全袋検査で、流通する米はもとより飯米・縁故米を含めた全ての米を対象に検査が実施されました。

モニタリング検査は、旧市町村を単位として市内を37に細分化して調査されましたが全ての地域において100Bq/kgを超える米は検出されませんでした。

また、モニタリング検査と平行して、「いわき地域恵み安全対策協議会」が中心となり、ベルトコンベア方式の放射性物質検査機が市内9ヶ所に配置され、全袋検査が実施されています。12月15日現在で、いわき市産米46.7万袋が検査され、うち99.7%は測定下限値未満でした。しかし、1袋が100Bq/kgを超えたほか、数カ所で作業機械に付着したホコリによる汚染と考えられる米が検出されています。100Bq/kgを超えた地区では、出荷の自粛が求められましたが、管理計画が作成され、約1週間で自粛の解除がなされています。詳細な原因は究明中ですが、土壌の放射性物質の濃度は低いもののカリ成分量が少ないことから、25年度はカリの増施を中心とした技術体系を組み立てていく考えです。具体的な対策は、地区座談会等で提示いたします。

<いわき市における全袋検査等検査状況>

平成24年12月15日現在

	測定下限値 未満 (<25)	25~50 Bq/kg	51~75 Bq/kg	76~100 Bq/kg	100 Bq/kg超	合計
検査点数	465,378	1,328	37	7	1	466,751
割合	99.71%	0.284%	0.008%	0.002%	0.0002%	100%

(ふくしまの恵み安全対策協議会HPより)

県オリジナル新品種「天のつぶ」

いわき地方における県オリジナル水稲品種「天のつぶ」は、昨年度から作付が始まり、本年度は目標の約50haに対し、約118ha（種子配布量から推計）作付されました。今後、「コシヒカリ」、「ひとめぼれ」と並ぶ主力品種として、いわき地方の稲作を担っていくことが期待されています。

「天のつぶ」は、「コシヒカリ」より出穂期及び成熟期が早く、稈長が短く倒伏程度が小さいため、「コシヒカリ」より早い収穫が可能となり、水稲の作期幅を広げることで大規模水稲生産者の経営規模拡大を図ることが可能となります。

また、「天のつぶ」は、「コシヒカリ」よりも玄米の粒厚が厚いため、目の大きいふるいでふるっても減収しにくく、高品質米生産を図ることができます。

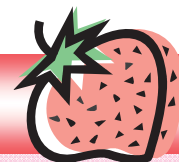
なお、来年度のいわき地方における「天のつぶ」作付は、本年度以上の面積が見込まれています。

今後とも各種会議等をおして「天のつぶ」の作付推進を行っていきます。



「天のつぶ」(収穫前、9月下旬)

復興いちごハウス



いわき市平菅波地区古墳近くに建設中のハウスは、園芸産地復興プロジェクト支援事業で建てられたいちごハウスです。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災の津波によって、多くのいちごハウスが被害を受け、今でも塩害による株の枯れ上がりが発生しています。また、高齢化等も重なり生産者数が減少している状況にあります。その現状を改善するため、事業を活用して、いちご産地生産者の支援、担い手の育成、東日本大震災からの産地復興を目的として建てられました。

現在は、土耕ハウスの20aが完成しており、ハウスの中では県オリジナル品種の「ふくはる香」の栽培が始められています。今年度中に、同じ敷地内に高設栽培ハウス20a、育苗施設20aが完成予定です。

また、栽培だけでなく研修生の受入先として活用することで、新規就農者育成の側面も兼ねており、これからの地域のいちご栽培において様々な機能を担っていくことが期待されています。



復興いちごハウスの外観



土耕いちごハウスの内部

第43回東北農村青年会議宮城大会でプロジェクト発表

いわき農業青年クラブ連絡協議会会長助川成光氏は、11月に宮城県で開催された農村青年会議で「ハウス施設環境の違いによるトマトの収量と収益性への影響」と題して、福島県代表としてプロジェクト発表を行いました。

助川氏は、今回取りまとめた成果を生かし、収益性の高いトマト経営を目指すとともに、規模拡大を図り、法人化も視野に入れています。さらには地域の担い手としての資質も高めようと、日々意欲的です。



プロジェクト発表の様子

人・農地プラン（経営再開マスタープラン）

～取り組み状況と推進～



いわき市では、東日本大震災の発生により津波被害を受けたり、東京電力福島第一原子力発電所事故の影響により、農業生産体制やそれを支えてきたコミュニティに大きな損害が生じました。

経営再開マスタープランは、地域農業の復興とその発展を図るための「未来の設計図」です。

また、このプランに位置付けられると、青年就農給付金や農地集積支援金等の助成を受けることもできます。

現在、いわき市管内では、21地域で「人と農地の問題解決」や「農業経営の再開」を目指して、今後の中心となる経営体（担い手農家）や地域農業のあり方について集落や地域内での話し合いが始まっています。

皆さんの集落・地域でもできるところから、そして必要な部分から話し合いを始めてみませんか？



小久地区経営再開マスタープラン作成検討会

イノシシから農作物を守ろう！！

イノシシによる被害が拡大しており、各地で対策がとられていますが、十分な効果が出ていない事例も見られます。

イノシシ対策の意外な落とし穴をご紹介します。

せっかく設置した電気柵も使い方を間違えると効果はありません。

以下の場合、正しい使い方へ見直しましょう。

（その1） 日中はイノシシいねえから、電気切ってもいいけ？

日中は警戒して姿を見せませんが、食べ物を見つければ昼夜を問わず現れます。

イノシシの毛は電気に強く、鼻が接触しなければ意味がありません。電気柵に鼻を接触させ、電気ショックを学習させるため、設置期間は日中も通電しておきましょう。

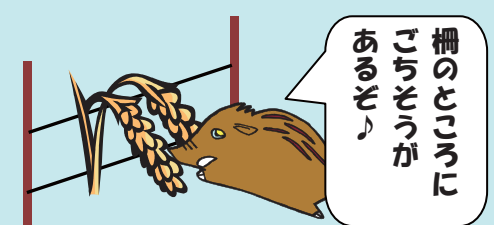
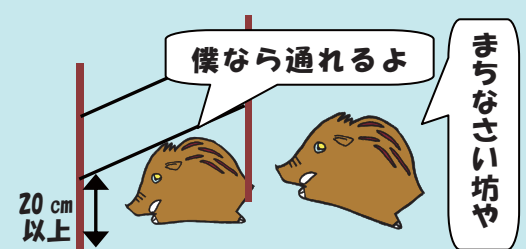
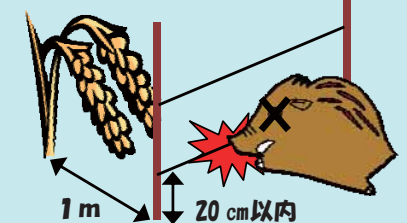
（その2） 草刈り大変だから、1段目の線はちょっとくらい高くしてもいいけ？

仔イノシシ（うり坊）を追って、母イノシシは無理にでも通ります。草刈りを行い、1段目の高さは守って下さい。

（その3） 電気柵の外に作物はみ出てっけど、いいけ？

ごちそうを見つけてしまうと、電気柵はただの目印です。柵からはみ出ないように設置して下さい。

正しい電気柵の使い方



「農地 = ごちそうの場所」とならないよう、農地の管理をお願いします。